

幕末の長崎におけるシュミットの医療活動

園田健二

日本がペリーの来航によって開国を余儀なくされて以来、日本にはまた、宣教師も来るようになった。米国聖公会 Protestant Episcopal Church は、一八五九年三月リギンズ John Liggins とウィリアムズ Channing Moore Williams とを長崎に派遣することを決定し、リギンズは一八五九年五月に、ウィリアムズは同年七月に長崎にやって来た。米国聖公会はさきに、リギンズの要望により、この二人の人選と同時に、この二人に同行する宣教医 Missionary Physician の人選をも並行して進めていたが、これに任命されたのがシュミット H. Ernst Schmid であった。一八五九年九月二十七日のことである。シュミットは一八六〇年三月十三日ニューヨークを出帆し、途中上海に立ち寄って少し医療活動をした後、一八六〇年九月頃長崎に到着している。シュミットが長崎に来た時には、さきに来ていた二人の宣教師のうち、リギンズは病気のためすでにアメリカに帰国していた。シュミットは一八六二年の一月頃まで長崎に滞在している。長崎での住居は、彼自身は漠然としか触れていないが、長崎市の東山手外人居留地であったと思われる。というのは、当時のこの外人居留地の借地人の名前にシュミットの名前が見えるからである。また、彼の名前の隣にはウィリアムズの名前がある。

シュミットは一年半ばかりの長崎滞在中に最大限の医療活動をしたが、長崎大学医学部発行の『長崎医学百年史』を初めとして、医学史関係の本や論文でこれまでシュミットのことを扱ったものは一つも見当たらない。シュミットがいた頃の長崎にはオランダからボンベが来ていて、診療や医学教育に活躍していた。このボンベのことは有名であり、よく知ら

れているが、シュミットのことになると医療活動はおろか、その名前さえ知らない人が殆どではないかと思われる。本稿で取り扱うゆえんである。

シュミットはニューヨークに本部のある米国聖公会の機関誌である『スピリット・オブ・ミッションズ』*Spirit of Missions* に長崎から三回手紙を書いている。この機関誌は米国聖公会が一八三六年から毎月発行していたものである。最初の手紙をシュミットは長崎に来て二か月位してから書いている。この手紙には日付が書かれていないが、この機関誌の一八六一年二月号に掲載されている。⁽¹⁾シュミットはこの中で、自分もウィリアムズ氏同様日本語の勉強を始めたこと、診療の方も開始したことを簡単に述べた後、自分は上海で中国人を診療したが、満足のいくものではなく、ここではそうでなければいいかと長崎での診療活動にちらつと不安を見せている。そしてシュミットは最後のところで日本人と中国人を比較し、まず、日本人には賞賛に値するものがいくつかあるように思われると語り、日本人は一般に非常に丁寧で、親切な民族であり、自分が偉大であると思っている点は、進んで進歩を受け入れる資質を持っていることであり、いまでこそ中国の方が文明が進んでいるが、やがてはこういう資質を持っている日本人が中国人を追い抜くであろうと述べている。そして同時にシュミットは日本人の悪い点をあげ、中国人と同様嘘つきで、物を盗み、人をごまかすところがあると結んでいる。

シュミットの二回目の手紙はシュミットが長崎に来てから約五か月後に書いたものであり、シュミット自身が前回同様そういうふう到手紙の中で述べている。日付は一八六一年一月二十四日となっている。これは『スピリット・オブ・ミッションズ』の一八六一年五月号に掲載されている。⁽²⁾二回目の手紙は一回目の手紙より長くて、一回目の手紙の約四倍はある。シュミットはまず、現在の日本では布教活動は十分にはできないことなど、ひとしきり当時の日本の社会情勢に対する自分の感想を述べた後で医療活動のことを前回よりは少し詳しく書いている。約五か月たったこの時点では、患者は時には非常に多くやって来て忙しかったり、時には少なかつたりしてまぢまぢであること、患者が自分の病院に来られない

ように長崎の奉行所が妨害し、診療活動を中止させようとしているという噂があること、しかし現在のところそういう動きはみられず、新しい患者がいまなおやって来ていることなどを述べている。

そしてシュミットは長崎での診療活動は中国での診療活動と同じく不満足なものであると語り、そのことについて話している。つまり、中国人と同じように日本人は自国の日本人医師を非常に信じていて、このこと自体は結構なことであるが、これが自分の診療にはマイナスに作用していること、また、日本人は苦い薬を飲もうとしなかったり、少し良くなる処方してやった薬をそれ以上飲まなくなったりして、病気をしている日本人は非常に扱いにくく、日本人医師たちも日本人患者のこういう欠点について不平を言っているということを述べた後、もっともこういうことは日本人や中国人だけに限ったものではないがということをつけ加えている。シュミットはさらに、診療をする際もう一つ困ることは長崎のかなり裕福で知的な人々が無料で診療を受けてもらおうとしなかったり、薬を受け取ろうとしないことであり、また、比較的貧しい人々や非常に無知な人々が日本人医師が教える薬草の煎じ薬に非常に頼っていることであるというふうに言っている。

シュミットはこのように異国での診療活動に少し悲観的、懐疑的になってきていて、さらに続けて、診療活動に関する限り宣教医は東洋人の間では役に立たず、自分と似たような立場にある他の医師も同じようなことを言っているし、いかに忙しくても自分はずますますこういうふうに感じるようになったと述べている。

そして、自分をもっと役立たせるためにシュミットが考えついたことは、日本人医師たちに現代医学の実際を教えることとであった。彼らに教え始めてみて、シュミットは嬉しいことに日本人医師たちが非常に熱心に学びたがっていて、自ら進んで自分に教えを請うようになったと言っている。シュミットが実際に始めたのは一クラスの日本人医師たちに英語で教えることであって、これは四か月間続けるつもりであった。シュミットは後で使う時誤解されずにすむように、日本語に翻訳できないような医学用語を日本人医師たちに教え、彼らがこういう用語を理解することを願っていた。同時にシュ

ミットは、そうすることによって日本人医師たちの英語力が増し、将来自分たちだけで英語の勉強が続けられるかもしれないということも考えていた。シュミットはシュミットで英語の原書に書かれている医学的知識の理解の仕方を学生たちに教える一方、四か月後にはクラスで日本語で医学の講話が十分できるよう絶えず日本語の習得に努力していた。シュミットはまた、和英の医学語彙集も準備していたと述べているが、現在これは残っていない。さらに、医学とは関係なく、英語だけで教える別のクラスも持っていたと言っているが、ここでは純粹に英語だけを教えていたのであろう。

シュミットは三回目の、そして最後の長崎からの手紙を、一八六一年六月十三日、木曜日に書き始めている。書き始めているというふうに妙な言い方をしたのは、この手紙の前半分は六月に書いたものの、シュミット自身の病氣や多忙のために後半分はなかなか書けず、書き終わつたのは書き始めてから約十か月後の一八六二年三月二十日であり、しかもアメリカに帰る途中の船上においてであり、場所も南アフリカの希望峰付近からである。この手紙は『スピリット・オブ・ミッシェンズ』の一八六二年六月号に掲載されている。^(四)この手紙は全体で六ページあり、前二回のものよりもはるかに長く、シュミットの長崎滞在の総括とも言えるものである。そして前二回のものがややもすれば日本人に対して批判的であったり、長崎での医療活動に対して悲観的または懐疑的になりがちであったのに対し、この三回目の手紙からはそういう傾向は消え、日本人に対する深い愛着と理解が感じられるし、宣教医としての医療活動に非常な生きがいを感じていることが読み取れる。

シュミットはこの手紙の冒頭で、まず、前回一月に手紙を出してからこれまでの約半年の間に好ましい変化があったと述べ、それまで患者が来たり、来なかったりして波があったのが一定して増えてきたと言っている。シュミットに学ぼうとする医学生たちも次第に増えてきていた。そしてシュミットはこういう医学生たちの意見を受け入れて、診療することと医学生たちに教えることについて正式に長崎奉行 Governor の許可を求める。これはシュミットの医療活動について根も葉もない何か暗い噂をたてるものがない、学生たちがそれに不安を感じ、それなら奉行から正式な許可を貰った方がいい

いのではないかという彼らの進言を受け入れたものであった。こういう噂についてはシュミットは二回目の手紙でも触れていた。許可のことについてはシュミット以前の医師たちもそうせざるをえなかったということであった。シュミットはこの際アメリカ領事を通して申請をしている。長崎にいたこの時のアメリカ領事はウォルシュ John Walsh であり、この時の長崎奉行は岡部長常（駿河守）であった。出した申請書の返事もシュミットが予想した通り好意的なものであった。返事はオランダ語で次のように書かれていた。

妨害があるため貴殿から診療を受けられない者がいるという趣旨の二月五日（一八六一年三月十五日）の貴殿の書簡（第三十五号）を受領した後、この問題はしかるべき人物によって調査が行われました。しかるに、そういう、診療を受けられないと言っている者の氏名は確認できず、また、彼らが我々の側（奉行所）の人物から妨害を受けているという一事も確認できませんでした。従って、貴殿が治療を行われることに何ら障害はありません。

万延二年二月二十三日

（署名）オカベ・スルガノカミ（岡部駿河守）

この返事の中で奉行は患者のことに触れているだけで、学生のことは何も言っていない。しかし奉行はアメリカ領事のウォルシュとの会談で、患者も学生も自由にシュミットのところに行っていくことを断言したということである。そして奉行のこの返事が一般に知れ渡るとすぐにシュミットから診療を受けようとする者が急が増え、六月の初めにはあまりにも仕事が増えて過労からシュミットは初めて病床についている。

シュミットはこの話の後、少々愚痴をこぼしている。アメリカと日本で同じ数の患者を診察するのに日本の方がはるかに時間がかかると言っている。その理由としてまず第一にシュミットは日本人の時間に対する考え方をあげ、日本人は

時間の大切さを知らないか、日本人にとって時間は殆ど値打ちのないものであろうと述べている。というのは、日本人は非常な時間をかけて深々とお辞儀をし、私にはそんなにお辞儀をしなくてもいいですよと言っても無駄だからであると言っている。第二の理由は言葉の問題であり、これは日本語に対する自分の知識が限られているせいだとシュミットは考へ、日本語の勉強も患者が急増して以来お手上げの状態であるが、毎日どうしても日本語を何時間も話さなければならぬので、それでも少しずつ上達しているし、また、何人かの日本人に英語を教えていることも自分が日本語に上達するいい機会を提供していると述べている。

シュミットは彼の家にやって来る患者を診療するだけでなく、長崎市内のあちこちに出かけて診療をしていたので、いろいろな人と親しくなったり、人々の意外な側面を知ったりした。シュミットは自分が長崎の人々に深い興味を持ち、彼らの多くはひどい悪習 *vices* を行っているにもかかわらず、彼らを非常に好きになったのは自分が以前よりも彼らと深く付き合いをするようになったためだと言っている。シュミットがここでひどい悪習といっているのが具体的に何なのかかわからないが、とにかく彼は患者の家庭に往診に行き、患者が自分の家の外では決して見せようとしなかった人間的な気高い面に触れ、感銘を受けている。

日本人の家に何回となく往診に行くうちに、私は彼らが自分の家ではお互いに対して非常にやさしい、愛情深い態度をとっているのに気付きました。いちばん気難しくて、怒りっぽくて、厳格な患者が大勢の親戚の友人や親戚ではない友人に取り囲まれ、彼らはいやな気持をおくびにも出さず、進んで患者のあらゆる要求に応じ、尽きることのない辛抱強さでこういうことを全部行っています。子供と親のお互いの愛情は特に強く感じられます。この最も顕著な例を私はある日本人の医師の家庭で殆ど毎日見えています。この医師には大きい黒い目をした一人息子がいます、この息子はまだ完全には歩けません、もう日本人のあの低いお辞儀をするのが上手です。父親は自分は何か遺伝性の病気のために

長生きはしないだろうと思つていまして、息子が大きくなった時、父親の写真を見て、父親がどういふ顔つきをしていたかがわかるように、是非とも小さい息子のために自分の写真を撮つておきたいと思つていと私に語つてくれました。この人はふだんはおごそかで、いかめしい顔つきをした人ですが、自分の家に入って、小さい息子を自分のほうに連れてきてもらうともうあの威厳のある態度など全部捨てて、再び少年になつてしまいます。

シュミットは日本人の助手を一人、使用人を何人か雇つていたがこの使用人を選ぶ際の注意として面白いことを言つてゐる。もし善良で、信用でき、盗んだり、あるいはごまかしをしないような使用人を雇いたければ、妻子のある者を雇へというものである。理由はもし万一盗んだり、逃げたりして法律から逃れようとすれば彼の妻子は彼の代りに苦しむかもしれないということが頭の中にあるために、彼は犯罪は犯さないだろうからである。シュミットは日本人の友人は普通こゝういふ忠告をしてくれるものだと言つてゐるが、実際彼自身が使用人を選ぶ時にこゝういふ基準で選んだかどうかは何も言つてゐない。

シュミットが長崎に来ていたこの頃は、まだおおびらにキリスト教を日本人に布教したり、日本人を改宗させたりすることはできなかった。こゝういふことは新教といえどもまだできなかったのである。従つて当時アメリカから長崎に来ていたウィリアムズやオランダ改革派教会のフルベッキ Guido F. Verbeek らは日本語の勉強をしたり、英語を教えたりして過ごしてゐた。しかし彼らはそうしながらも何とかして水面下でキリスト教を広めようとしてゐた。そしてこのことは宣教師として来日してゐたシュミットにも言えることであり、彼もあらゆる機会をとらえてキリスト教を広めようとした。

米国聖公会の敬虔なクリスチャンであるシュミットの目には当時の長崎の風景の中には時折眉をひそめさせるようなものもあつたやうである。いつもの鉄砲撃ちの稽古の際に、ある上級武士などは自分の部下たちに褒美として非常に淫らな

春画を配っていたという。しかしこういう人物がいる一方では高潔な人もいて、シュミットは極めて聡明なある日本人医師のことについて述べている。シュミットはこの医師に日本の宗教の愚劣さを説いたり、キリストの教えを話したり、聖書の一部の日本語訳を読ませたりする。時にはシュミットは診療に訪れた患者の家庭でできるだけ押しつけがましくないようにクリスチャン的な生活とはどういうものか教えようとしたりしている。こういうふうにはシュミットがキリスト教を慎重に教え込もうとした相手は医者や患者が多かったわけであるが、彼はまたこういう患者すべてが白人の方がより優れていることを率直に認めていて、病気がなおるから彼のところに来て欲しいというよりはむしろ、白人の方が優れているからというのがおもな理由で、彼らが、彼が考えたという治療法にでも殆どいつも従う気になっているのだということを知る。

ところで診療報酬のことであるが、シュミットは当然診療は無料で行い、薬も無料で与えている。しかし診療を受ける患者の側からすれば、それではすまないと思つたのか、彼らはいろいろな品物を感謝のしるしとしてシュミットのところを持って行ったようである。こういうプレゼントのことは二回目の手紙でも彼は少し触れていたが、今回の手紙ではこの辺の事情を詳しく書いている。患者が持って来たものをなぜ受け取れないかシュミットは患者にわからせるのに最初のうちはかなり苦労したようである。ことわたつた時には患者はよく気を悪くしたり、困つたような様子だつたと言っている。特に、貧しい人が干した豆を一クォートとか卵を一ダースとか持つて来た時にはことわるのが苦痛だつたと言っている。自分たちがとるにたらぬ人間だからことわられた、というふうには彼らに思われはしないかとよく思つたようである。何とかして何かささいな物をとにかく受け取らせようとする姿は見ていて哀れであつたとシュミットは述べ、島原からやつて来た十五歳の娘の祖父の話をしている。

この娘さんは彼女から殆ど視力を奪つてしまふような、なかなか治りにくい、痛い目の病気で私のところにやつて来

ました。彼女はそれまで一度も「オランダ」(＝オランダ人)のところへは行ったことがありませんでした。この「オランダ」という語は日本語では「外国人」と同意義語になっていまして、それで最初のうちは彼女は滑稽な程私を恐がり、彼女の目に必要な薬をつけるために私が彼女に近づくと時には彼女は必ず誰か友だちを自分のすぐそばに連れて来ていて、私が彼女の目を忙しく治療している間や、私が彼女の椅子の近くにちょっと立っている間など、彼女は友だちの両手を自分の両手の中でしっかりと握っていました。しかし、彼女の治療を終えるのにほぼ三か月かかりましたので、彼女からはこういう恐がったところやおずおずとしたところはなくなり、彼女は完全に良くなった時には全く昔からの友だちでもあるかのようにリラックスした様子で別れて行きました。彼女の七十二になるおじいさんは大好きな孫の病気が良くなったことが非常に嬉しくて、私に大きな米袋を送って来ましたが、この米はおじいさんが自分自身の手でつくり、私のために特別に選んでくれたものでした。おじいさんは私がこの米袋を丁寧にことわった時にはとても悲しそうでしたし、何とかして私に受け取ってもらおうとしました。やっこのことで私が一握りの米を取り出してそれを紙袋の中に入れ、おじいさんの親切の記念としてこの紙袋の米をとっておきますと言いながら紙袋におじいさんの名前を書いた時、おじいさんはいくぶんかは満足したようでした。

シュミットに直接渡すこととわられるので、シュミットが戻って来て渡したものを返せないようにするために、自分がいなくなつてからシュミットさんに渡してくれるようにというふうには彼の使用人に頼んで、菓子や卵を渡して帰る人も何人かいたという。シュミットは、実は今手紙を書いているこの金ペンそのものがそうであると言ひ、この金ペンはある日部屋で見つけたもので、小さい紙の箱にきちんとして入れてあったものだと言っている。そしてこの箱には感謝のしるしとして受け取ってほしいという、誰かわからないが、患者からの手紙が入っていたという。シュミットはこの患者が誰かいる調べたがついにわからなかったと言っている。

シュミットは自分が長崎の人々から信用され、感謝された例として、さらに二人の患者の話をしている。最初は長崎市の目抜き通りである浜町あたりに住んでいた患者についての話である。

私はある日ハマノマチから少し入ったところにある非常に裕福な商人の家に呼ばれました。……部屋には立派な飾り付けがしてあり、厚い畳の上は、日本人が普通そうするように布団が敷いてあり、この布団には一敷布団や掛け布団や他の寝具類は全部きれいな絹織物でできていましたが一非常な痛みを訴えながらこの一家の母親が寝ていました。その周囲には親方たちや使用人が日本式の座り方で入り乱れてきつちりと座っていました。これは勿論苦しんでいる親戚の痛みを和らげてやりたいという気遣いからそうしたのですが、しかしこんなことをしたために母親からは狭苦しい部屋に入ってくるわずかの空気を奪ってしまったことでしょう。彼女は回復する見込みのない心臓の器質性疾患にかかっていました。彼女は痛みがひどく、あえいでいました。彼女にはほんのわずかの寿命しか残されていないように思われました。脚や足には既に浮腫が現れていました。彼女の体の全機能があまり働いていませんでしたし、あらゆる分泌物が止まっていました。日本人医師の話だとどんな薬も少しも効き目がないようでした。私はまず最初に彼女の痛みを和らげようとはしましたが、それも、せいぜい私に残されていることは彼女の痛みを一時的に和らげることだということとがすぐわかったからです。嬉しいことにこの目的はすぐ達しましたが、この時以来私は自分のこの患者に対してとめどのない、やっかいにさえ感じられる影響力を持つことになったのです。私が彼女の家に行った時はいつでも、もし私が彼女の家で長時間過ぎさなければ、彼女は不満でしたし、また、丘の上の私たちの宣教師の家の中にある私の診察室の入口は彼女の病室から見えますので、私が自分の部屋を出るやいなや彼女にもそれがすぐわかるように、彼女は立派な小型望遠鏡を持った付添人の一人に私の部屋の入口を絶えず監視させていました。もし私が自分の部屋を出て、彼女のところにすぐやって来なければ、彼女はやきもきしたものですし、もっと急を要する患者のために予定していた時間

全部がかかり、その日のうちに彼女のところに行かないでいれば、彼女の体は実際に悪くなり、私のところに何回も使
いの者をよこしてくれと言ってききませんでした。そしてこういうことは来る日も来る日も、どの薬も効かず、浮腫の
滲出が胸部にまで達し、速い勢いで彼女を圧倒しようとしているにもかかわらず続きました。私は医者仲間でそう言う
ように、ありとあらゆる *materia medica* (藥物) を使っていましたし、あとはただ一つの手段しか残っていませんで
した。そういう手段に訴えたくはありませんでしたが、そうせざるを得ませんでした。嬉しいことに数日してそれは患
者に効き始めました。眠っていたか死んでいた各機能が目覚めて息を吹き返し、浮腫は完全に消えました。彼女は際限
もなく、繰り返し繰り返し感謝の言葉を述べました。以前は痴呆状態で恍惚として寝ていたのが、もう一度椅子に座っ
て、雑談に加わることができたのです。彼女は裕福な日本人が田舎の別邸をそう呼んでいるように、「茶房」に引越
す話をしました。そうしたら毎日私を拜みに来ますと彼女は言いました。かわいそうに、私は彼女は私たちの宣教師の
家まで続いている多くの階段をもう再びのぼることはできないだろうということが十分よくわかっていました。しかし
勿論私は彼女にはそうは言いませんでしたし、むしろ私は人を崇拜するのは悪いことであるということや、差し迫った
死から彼女が一時救われたことに対しては私に感謝をするべきではなく、天にまします神に対してするべきであるとい
うこと、神の御許可によつてのみ彼女の容体が良くなったのであるからということなどを彼女に話しました。私の彼女
に対するこういう説明は全部極めて舌足らずで、それも、私の日本語に対する知識が非常に貧弱であつたからというこ
とばかりではありませんでしたが、彼女や彼女の家族のかたは十分理解し、また興味を持ち、私が一緒によくキリスト
教について話をした、私の助手であり、私が気に入っていた生徒でもある日本人の医師に質問をしたりしていました。
私が二度めの病気になったのはこの頃でしたし、私は少し海風にあたって健康と体力を回復しようと考えました。しか
しこの女性は私がしばらくいなくなる話を聞いた時、彼女は家族を自分の布団の周りに呼び、私がいなくなるので自分
は間もなく死ぬだろうと言ひ、そしてすぐ容体が非常に悪化したので、私は上海への旅行の予定をとりやめざるをえま

せんでした。

シュミットは次に最悪の腹部の浮腫にかかつて彼のところにやって来た女性の話をしている。

彼女の症状は非常に悪く、内科的療法では治療が受けられるだけの十分な体力がないということが間違いないわかつたので、なしうる最善の方法である手術によって水を取り除くことを考えました。しかし彼女は手術が恐くて、シールトに手術を勧められたがそれを既に丁寧なことだったという話をし、同時に、せめて内科的治療をためしにやってみないかと私に懇願しました。私はいいやながらそうしました。まもなく彼女の滲出は非常に目にみえて減少しましたが、彼女のわずかな体力は急速になくなりました。この頃彼女は自分の子供の一人が病気になることを知り、病気の娘の看護ができるように、(一五〇マイルばかり離れていましたが)、自分の家に帰ることに決め、しかし同時に、もう一度私のもとで治療をうけるために二、三か月してから戻って来るつもりであると明言しました。彼女は家に帰る非常に明白な理由を示しましたので、私が彼女にここにふみとどまるようにと説得することは考えられませんでした。彼女は二度と再び決して私の診察室には姿を現すまいと私は心の中では思っていました。しかし私は間違っていました。彼女は確かにまたやって来ましたし、そして、彼女の病気が最初私が彼女を診察した時と同じ段階に達してしました。彼女はこれ以上は生きられないだろうと思っていて、その結果なおつても死んでもいいから、私に必要な手術をしてもらいたいと言いました。この患者についてする必要のある話は本当はこれだけですが、彼女が実に落ち着いた様子で手術を受けたことや、一年後彼女にまた会った時、太った健康そうな女性が、私が最初見た時の哀れな、骸骨のような女性と同一人物であるということが殆どわからない程彼女が完全に回復していたということをお聞きになって、いい感じをもたれることでしょう。彼女や彼女の家族のかたは非常な感謝の念を示され、彼女が田舎に帰ってからは彼女の

夫は私の日本人の助手あてによく手紙をよこし、彼の妻がずっと健康であることや、あいも変らぬ私への感謝の気持を私に伝えてきたものです。

これまでは一八六一年六月に書かれたものである。前に述べたようにシュミットは自分の病氣やら多忙やらで、この三日の手紙のこれからの部分は一八六二年三月二十日に書きあげている。後半の部分を見てみよう。

シュミットはまず、一八六一年に彼が診断した患者の数をあげ、自分が診断した患者はほぼ千人であると言っている。しかしこの数については、多くの人がいろいろな病氣で何回も自分の治療を受けているので、症例ごとにあげれば数はずっと増えるだろうといっている。また彼は数多くの家庭のいつものかかりつけの医者であったと言っている。

シュミットは次に当時の長崎でどういう病氣が多く、またおもな病氣の原因は何であるかを述べている。それによると、もっとも多いのは脳、心臓、肺、胃や皮膚の病氣である。そして多くの人が結核 *pulmonary consumption* にかかっていたという。この病氣が多いのは氣温が非常に突然に、頻繁に変わるためや、どういう通風や荒々しい風でもあたるような胸をむき出しにした着物の着かたや、たび重なる不節制のせいであると彼は言っている。様々の種類の卒中は、さかやきした頭を炎のような、焼けるような日光にさらしているためであり、寝る前に殆ど毎晩多くの人が飲むおびたしい量の酒のためであり、比較的運動をしないためであり、そして幾分かは明らかに、脚や足への、あるいは脚や足からの、血液の流れを妨げるような日本人特有の座り方のせいであると説明し、上の酒の話のところではわざわざこの部分に括弧をつけて自分は毎晩きまって八ポイント程（約二升）飲む人を知っていると言っている。消化器系の病氣は、簡単に説明がつくとし、これは砂糖菓子や酒や一番消化の悪いさまざまの食べ物非常に多くとるためであるとしている。シュミットはこれに関連して、日本人は本当に消化の悪い料理をできるだけたくさんつくろうとしているかのようだと言っている。彼はまた「モチ」（餅）に触れ、この正月の食べ物程健康に悪いものはなく、日本の医者が目にするいろいろな皮膚

病のいくつかには餅が大いに関与しているようだと言っている。彼は皮膚病の原因としてさらに、貧しい人々が毎日食べている半分腐ったような肉や野菜類、じめじめした湿気が多いところにある家、もっとも陥り易い罪 *besetting sins* にふけたことなどをあげ、こういうことがおもな原因となって簡単な発疹から恐るべき癩病まで各種の皮膚病が見られると言っている。なお、シュミットはここで、またも、もっとも陥り易い罪とは何かということを具体的には何ら言っていないがたぶん遊廓を中心にした男女の性の問題ではないかと思う。彼は皮膚病の後で、さらに腸チフスと発疹チフスをあげ、とくに発疹チフスは長崎の病状の中で重要な役割を演じていると言っている。長崎の地元の開業医はこの二つの熱病の性質を少しも見抜いていないので、これらの熱病は彼らの手にはおえず、彼らの手にかかると患者は死ぬことが多いが、しかし自分にはこういう熱病の性質がわかっていたので、病気の進行は異常に速いものの、十分治療ができたと言っている。

シュミットは長崎での医療活動の締めくくりとして次のように報告している。実際は次の引用の後に長崎および日本でこのキリスト教布教の現状を述べた報告が約一ページ半に渡って続いているが、医療とは関係がない。

知人であるイギリス商人の方々の親切な御援助により、私は非常に嬉しいことに限られた数の患者のために病院 *hospital* を開くことができましたし、病院も開いていた間はほほいとも患者でいっぱいでした。実際のところ、万事は非常に順調に、非常に将来に期待の持てる状態で、非常に面白く進みましましたので、全く自分の予期しない病気だけのためにこの時期に私は自分の任地を離れなければならないことになってしまったわけです。しかし私は、いまでこそ私の病院には一人もいませんが、ずっとそうではないということを心から望んでいます。

シュミットの病院がある場所については、すでに、浜町の女性患者のところまで彼女自身が少し触れていたが、高台の東

山手外人居留地の彼の住居の中にあつたのではないかと思われる。もつとも、彼は浜町の女性患者の話のところで、「私たち宣教師の家」と言っているので、一人で住んでいたわけではなく、同じ米国聖公会のウィリアムズもこの時期にはここにいたのではないかと思う。

シュミットは一八六二年七月一日ニューヨークに到着、その頃は健康状態もかなり良くなっていたという。

文 献

- (一) 長崎県史編集委員会編『長崎県史』(対外交渉編) 八四〇頁、吉川弘文館、東京、一九八五年。
- (二) *Spirit of Missions* 26(1861): pp. 88-9. なお、筆者が参照したのは、アメリカ議会図書館所蔵のものである。
- (三) *Ibid.*, 26(1861): pp. 147-8.
- (四) *Ibid.*, 27(1862): pp. 178-183.

(長崎大学医療技術短期大学部)

Schmid's Medical Activities at Nagasaki at the End of the Tokugawa Shogunate

Kenji SONODA

In March, 1859, the Protestant Episcopal Church in the United States headquartered in New York sent two missionaries, John Liggins and Channing Moore Williams to Nagasaki. They arrived at Nagasaki in May and July, 1859, respectively. The Church also decided to send a Missionary Physician. And in September, 1859, Dr. H. Ernst Schmid was appointed as Missionary Physician to Nagasaki. Dr. Schmid

sailed from New York on March, 13, 1860, and reached Nagasaki around September of the same year. He stayed there until about January, 1862, when an illness forced him to leave Japan.

Although Dr. Schmid stayed at Nagasaki for about a year and a half, doing great work in the field of medicine, no books or articles on the medical history of Japan have made reference to him so far.

Dr. Schmid sent three letters to the headquarters of the Protestant Episcopal Church in New York, informing them chiefly of his medical services at Nagasaki. All of these letters were printed in *The Spirit of Missions*, the monthly bulletin of the Church: the first letter was printed in the February 1861 issue, the second one in the May 1861 issue, and the third one in the June 1862 issue, of the bulletin. And it is only through these letters that we can understand his medical activities at Nagasaki.

He opened his hospital at the missionay dwelling-house on the hill. Not only did he treat a good many patients at his office daily, but he visited them in the city, which brought him into close contact with them. Although he treated them, and gave medicine to them free, many tried to give him presents as a kind of a medical fee. He had a most extensive practice among the Japanese and his patients totaled more than one thousand in 1861. He also taught medicine to a class of Japanese doctors in English. They were quite eager to learn.

Schmid says the diseases he most frequently met at Nagasaki were those of the brain, heart, lungs, the stomach and the skin. He explains why many fall victims to tuberculosis, apoplexy, the diseases of the digestive system and the skin. He also says the Japanese doctors were not able to treat those suffering from typhoid and typhus because they did not know the nature of these diseases.